

分かり合える教員同士。

問題を抱えた後に新しい道が開けた

京都へゆうゆうの里

倉光正己様(78歳)平成28年3月入居

展子様(75歳)平成29年7月追加入居

仕事のやりがいと共通の趣味

ご主人 現役時代は大学の電気工学の教員。研究も教育も面白くやりがいがありました。

奥様 私は中学校の教師。子供の教育は難しいけれどとてもやりがいある仕事です。担任クラスを持つのは大変でした。父兄は家庭でできないことも学校の先生に期待してきます。

ご主人 小中高大学とあるが、家内からは「大学の先生が一番楽で



奥様の中国教員時代に、ご主人と万里の長城で

しょ」と言われていましたね。小中時代の先生の影響力は大きく、どう対応するかが子供の成長を左右します。やりがいといえば小学校の先生にはかないません。

奥様 一方、普段はプライベートな時間もないことから、なんとか自分の時間を工面してリフレッシユする必要を感じていました。そこで二人で国内外のあちこちに旅行をするようになりました。

ご主人 加えて体力を鍛えるために始めたのが登山です。定年まで待つてからでは遅いと、二人で山の会に入りました。そこで訓練し山登りの楽しさを覚えました。体は丈夫になり、友達もできました。百名山は70ほど制覇しました。

突然訪れた妻の転機

ご主人 家内が山小屋での事故で腰を圧迫骨折しました。救急へりで救助される事態になったのです。幸いにも無事に退院できました。

奥様 そのリハビリ入院中に、同室のお年寄りが看護師さんたちになわがまま態度をするのを見ているうち、自分はこのまま生涯を終わっていいのだろうかという疑問が湧いてきました。退院したら「日本語教師として中国の大学へ行つて、世の役にたちたい」と決意。

ご主人 突然の話でびっくり仰天です。しかし、私は車椅子の家内を一生介護すると一時は覚悟したのですから、それが元気になって行きたいというのなら反対はできません。協力を表明しました。

奥様 中国の学生との交流は思い出に残る貴重な体験になりました。度々中国に私を訪ねてきた夫にとつても中国の学生や人々との交流は有益な体験だったようです。

病気が本気にさせた老後の選択

ご主人 家内の帰国後しばらくしたある朝、今度は私の全身に激痛が走りました。自己免疫疾患という病気の一つでした。私はそのまま入院となりステロイドを投与する日が続きました。快方に向かいましたが、副作用で体力は激減。発症から一年半、漸く病状も落ち着いた頃に大阪へゆうゆうの里を知りました。いずれ自分たちは、こういうところに入ろうと考えていましたが、まだ先のことと

思っていたのです。病気で状況は一変し本気で考えようと腹を決めました。

奥様 最終的に私たちは、

大阪のような都会よりも田舎の方が合っていると京都を選びました。

「まだまだ、変わる」

ご主人 契約後すぐにアスレチックジムとアクアのプログラムに参加しました。一身体力の回復が必要な時にぴったりのリハビリとなりました。昨年、「葉ゼロ、保護観察」まで漕ぎ着けました。今は里山登り程度ならできるようになりました。

奥様 ジムのトレーナーは夫をその気にさせました。夫は一旦やり出せば、持続する力を持っています。ご主人 最近私は宵っ張りの習慣も変えて、朝のラジオ体操、茶畑道のウォーキングを続けています。

奥様 私はサークルの友人ができました。山登りも続けています。「まだやり残している」という意識が私のエネルギー源です。そういうモチベーションを保ちながら、暮らして行きたいです。

